

国際エイズ会議 2016 参加報告書

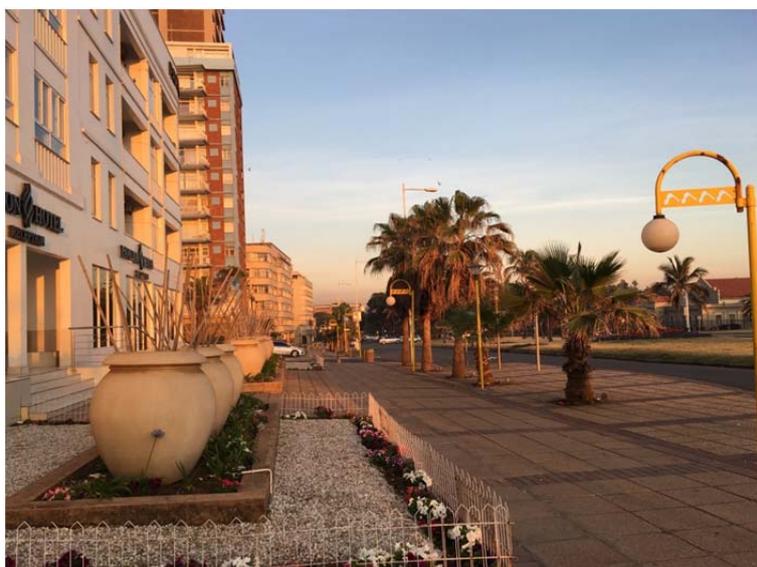
東京大学医科学研究所附属病院

安達英輔

エイズ予防財団の派遣事業により、7/18～22 に南アフリカ共和国ダーバンで開催された国際エイズ会議に参加した。日程としては、初日のオープニングセッションから最終日のラパトアセッションの臨床医学部門まで参加できた。ダーバンは南アフリカの大都市で治安はよいとは言えないが、IAS は外国人に配慮した運営を行っており、空港と会場間、ホテルと会場間でシャトルバスが用意されているなど期間中、治安面に大きなストレスを感じることはなかった。会場 (International Convention Center Durban) は街の中心部にあり、午前 6 時過ぎより午後 9

時頃まで多くの参加者がいた。早朝の会場の写真を添付する。宿泊は (下、写真左) は会場から 0.5～1km ほどのビーチに近い場所にある小さなホテルにした。オフシーズンと聞いていたが宿泊客は多く、シャトルバス以外にもタクシーをシェアし速やかに会場に行くことができた。ヨハネスブルグ在住の南アフリカ人の話ではダーバンは一年中天气がよいため冬でも人気のリゾート地であるらしい。

会議全体として、基礎医学部門の中心の話題は HIV の passive immunization と AMP (Antibody Mediated Prevention) studies であり、HIV vaccine VRC01 の



phase 1 の詳細の報告もされた。臨床医学部門では、結核や HBV/HCV との共感染の検査法や治療法、女性に対する PrEP や on demand PrEP など最新の臨床試験についての議論が中心であり、日本の学会とは中心となる話題が異なっていた。抗 HIV 療法に関しての新しいエビデンスや Cabotegravir の治験と PrEP に関する最新のデータなどが報告されており、これらについては一部詳細を後述する。HIV 診療は作成された背景や対象とする国家、地域が異なる複数のガイドライン、標準とされる治療法、予防法があり、完全なコンセンサスがないのが実情となっているが、この学会では on demand PrEP、女性への PrEP、empirical TB treatment など比較的新しい概念を推奨するプレゼンターが多い印象を受けた。新しい治療法を模索することと同様かそれ以上に政治や社会医学的なアプローチが重要であるものが感染症であり、HIV はその代表と言える。本会議でも世界中のプレゼンターから他の地域での問題点を提供していた。タイでは TGW (Trans Gender Women) の HIV のリスクは MSM (Men who have Sex with Men) の 2 倍以上であることが報告され印象深かった。TGW は最もリスクが高い集団であるが、MSM など他のコミュニティに比べこれまで社会的な対策が大きく遅れている。TGW の社会的地位や stigma の問題は大きな課題である。

3 日目には昨年の最大のインパクトであったと言える START study に関していくつかのサブ解析が報告されていた。CD4 500 cells/ μ L 以上で診断直後に ART を開始した患者では 50 歳以上、血漿 HIV-RNA 50000 c/mL 以上、CD4/CD8 0.5 以下、Flamingham 10 year score 10 以上で特に絶対的リスク減少が大きかったということであった。また EFV を含む ART を診断直後に開始した群では自殺行為のリスクがあがる可能性などが報告された。これまで、抗 HIV 療法はやや女性に対するエビデンスが少ないのが現状となっているが、女性に対する ABC/3TC/DTG に対する安全性と有効性を検討している ARIA study の経過が報告されていた。そこでは抗 HIV 療法未経験の女性で、ABC/3TC/DTG 群が TDF/FTC/ATVrtv 群を上回るウイルス学的効果が示されていた。ABC/3TC/DTG への switch を検討している STRIVING study の 24W、48W の結果も報告され、変更後も良好な効果が維持されていた。これらの結果はこれまでに報告された臨床研究から予想される範囲内ではあるものの、エビデンスがかけていた部分を補うものであり、注目すべき重要なトライアルであると言える。Cabotegravir の注射剤を含む抗 HIV 療法である LATTE-2 の結果も報告され、8W 毎の投与で失敗例が多かったことから、第 3 層試験では 4W 毎の投与となる予定ということであった。個人的に印象深かったのはアルゼンチンで行われた DTG/3TC の HIV 未治療者への有効性を検討した PADDLE study であった。症例数が少ない pilot study であるが、標準的な 3 剤の抗 HIV 療法と同様の効果が示されていた。これまで、治療未経験者に対する 2 剤の抗 HIV 療法の非劣性を示した報告が存在するが、DTG/3TC という安全性が高く、相互作用が少ない薬の組み合わせではエビデンスがなかった。3TC

は安価な薬剤であることも注目に値する。

会議中、HIV 感染者に対する言葉として社会医学から基礎医学分野まで含めて、PLWH (People Living With HIV) という略語がよく使われていた。これは本邦ではあまり使われないが、最近の国外の文献などでよく使われているものだ。有病率が低いところでも 1 割を超えている南アフリカ周辺では HIV 感染症はまさに国の一部であり日本における生活習慣病と同様の国民的疾患である。まず、HIV と共存する社会を作り、戦っていく必要がある。PLWH はこのことをよく表している言葉であると感じた。